

<特集>

## 天邪鬼日記

大辻民樹 <放送作家>

### 嫌煙主義者さんへ

とにかく何でもかんでも人に逆らい、小理屈つけて喜んでいる我ら天邪鬼…、その天邪鬼にとっての天敵が原理主義者である。何しろ、彼ら、聞く耳を持たない。

聞く耳持っていただけなければ、いくら小理屈こねても、そう、聞いてくれない。

それだけじゃない。彼らは、自分たちとは違う考えを聞かないどころか、違う考えを排除しようとする。天邪鬼にとっては正に天敵、下手をするとこの世から抹殺されるのだ。原理主義とは、もともとキリスト教でとにかく聖書に書かれていることは全て正しいと信じる一派であり、当然避妊も堕胎も認めずダーウィンの進化論も拒否する人々のことを指した。そのことからあることの無謬性を信じ、それ以外のものを認めない傾向の人びとも「原理主義」と形容するようになった。

1970年代、リンチ殺人事件を起こし「あさま山荘事件」までつながる連合赤軍も、80年代から90年代、弁護士殺人や地下鉄サリン事件を起こすオウム真理教も、ある意味、原理主義のもたらすものであった。さらに云えば、何ら科学的根拠もないままユダヤ人迫害を行った第二次大戦時のナチスドイツも、原理主義と私には思われる。

自らを信じ、それに与しない他を排斥する…、非常に恐ろしい原理主義…、今、世を挙げてその被害にあっているのが「喫煙者」である。正に、排斥の対象だ。このような文章を書こうとしている私は勿論愛煙家、ニコチン中毒者である。ここまで書くのにすでに二本のケントを灰にしている。

さて、嫌煙運動を展開している人々は、自分たちが“原理主義者”なんてとんでもないと仰有るかもしれない。では、私が彼らを原理主義者と呼ぶ小さな一例を挙げよう。何年前からか知らぬが、「歩き煙草する人の煙草の高さは子どもの目の高さ」なんて嫌煙コピーが世間に喧伝されるようになった。最近もどこかのポスターで見た。

私も混雑する中での煙草とか、歩き煙草はマナーに反することだとは思いうし、現代の風潮の中では人の目が怖くて出来ない。しかし、しかしだ。

私の子どもの頃は大人の男性は殆ど煙草を吸っていたし、彼らは人混みであれ、道であれ、所構わずそこかしこで吸っていた。だが、私はその火のついた煙草が子どもの目に当たったなんてことは聞いたこともないし、事件としても知らない。つまり、歩き煙草は子どもを失明される恐れがあるなんてことは、恐れがあるだけで殆どあり得ないのだ。第一、そんなことを云えば、奥様方のブランドもののバッグの角だって、おじさま方の自慢のあのゴツくてデカイブランドもの腕時計だって、全て子どもの目の高さだ。

つまり、いつ子どもを失明させるかわからない凶器と云うことになる。

そっちには目を瞑り、歩き煙草だけを悪の権化のように云う。このことに原理主義の匂いを感じるのだ。だいたい、何でもかんでも「**子どもの健康に悪い**」とか「**子どもの教育に悪い**」とか云って禁じようとする風潮にも天邪鬼として気に食わない。

プロ野球中継で乱闘が起こると必ずアナウンサーか解説者が、「**子どもも見ているんですから…**」なんて云う。誰が教育の為に野球の試合を見ていると云うのか。乱闘でも何でも見せればいいのだ。それに醜いと感じたり、狭気をカッコイイと感じたりするのは、その家庭、子どもたちの自由だ。都合の悪いことは隠そうとすることが最もいけない。

いかん、話がズレてきた。煙草の話である。

つい最近、昭和の映画スターが八十を過ぎて逝った。彼の遺言とも云うべき言葉、「**俺たちの若い頃の映画を見てくれ**」に従って、私も昭和 30 年代、40 年代の映画を見てみた。

その頃の熱さ活気は別にして、一番驚いたのは煙草を吸うシーンが多いことだ。

バー…待ち合わせ…朝食…喧嘩…どのシーンでも皆啜え煙草だ。しかも、主人公と云えるスターたちは皆、その煙草を吸う姿がシビれるほどカッコイイ。きっとあの頃のスターは、鏡の前でカッコイイ煙草の吸い方と云うのを研究したに違いない。

で、子どもの頃を思い出した。それこそ昭和 30 年代から 40 年代にかけてのことだ。

今から考えれば、世は正に煙草天国であった。電車、バスは勿論、信じられないだろうが、病院や映画館の客席にまで、ちゃんと灰皿が設置されていた。「**今日も元気だ、煙草が上手い**」、テレビではそんな専売公社のCMが男らしい男の労働の対価として演出されていたし、ウチの近くの田んぼでは、キツイ農作業の合間の休憩では男も女もあぜ道に座り、女はお菓子、男はうまそうに一服、と云うのが定番だった。

男の子にとって、煙草は大人へのステップであり、それこそ憧れであった。私は、野球部に属していたのでデビューは遅く、十七の夏だった。ま、それでも違法ではありませんが…。「**オイ、煙草吸うと走るのキツイぞ**」と云う先輩の教えを守り、我慢していたのだ。

つまり、その頃から煙草は体にあまりいいものではないと云う自覚はあったのだろう。それでも吸いたかった。何しろそれはカッコイイ大人への通過儀礼だったから。

人生最初の一服は今でも忘れない。時は、高三の夏…甲子園の夢破れ、何をしていいかわからなかった夏休み。場所は、親父がやっとの思いで新築した家の私専用の子ども部屋。まず、勉強机の抽斗の奥に隠していた煙草をおもむろに取り出す。

遠くの村の自動販売機から闇に紛れて買ってきたチェリーだ。当時の人気刑事ドラマ『太陽にほえろ』で、ボスこと藤堂係長、石原裕次郎が角のたばこ屋で「お婆ちゃん、チェリー一つ」と云った姿にシビれ、最初の煙草はチェリーと決めていた。

そして、当時普及し始めた音質のよいエフエムラジオでエアチェックしたカセットテープをおもむろにラジカセにセット。ガチャンとプレイボタンを押し込む。最初の煙草のBGMは、若き五輪真弓の『煙草のけむり』と決めていた。

ピアノの前奏に続いて、♪たばこの～煙のなかで～♪と、五輪真弓の歌声が聞こえてくるのに合わせて、台所からくすねてきた徳用マッチをぎこちなく擦って、チェリーの先に近づけ、吸い込む。で、むせた。盛大にむせた。苦しくて、咳き込んで、涙が出て、すぐに灰皿で消し、窓を開け、ハアハア空気を取り込んだ。そんなに苦しんだくせに、以後、40年間、煙草を吸い続けている。

あの頃から考えれば、まさか喫煙者が現在のような日陰者になっているとは思わなかった。街に出て煙草を吸おうと思えば、正に難民である。会社でもダメ、公園でもダメ、道端もちろんダメ、喫茶店に入っても「煙草吸ってもいいですか？」などと声をかけねばならないし、さらにその答は殆ど「NO」だ。

ようやく見つけた街の喫煙所がまた酷い。狭いスペースに多くのニコチン中毒者が押し合いへし合い、酸素不足の金魚のようにスパスパ吸って去って行く。そもそも煙草を吸う行為、「一服」は休憩の意味でも使われるほどゆったりしたものでなければならない。それが、ベンチさえ置いていない。正にニコチン中毒者収容所だ。

最も酷いのが新幹線の喫煙スペースだ。全席禁煙と謳ったものの、さすがに喫煙車からの抵抗があったのだろう。車両の端に申し訳程度、四人も入れればいっぱいスペースを設けた。入り口は自動扉だがこれが狭い。入っても狭い。私、体重90キロあるが、これで腹がつかえる。もう少し体格のよい人は確実に入れないし、入れたとしても身動きとれなくなるだろう。これが喫煙者でなく、ただの休憩スペースとかなら、きっと文句が出て改善されるだろう。しかし、今や肩身の狭い喫煙車は、それでも有り難いと黙々と煙草を吸っている。いつからこんなことになってしまったのだろう。

「煙草を嫌う」、「喫煙者を認めない」と云うニュアンスで「嫌煙権」と云う言葉が造語されたのは、1970年代後期のことだと云う。但し、その頃はまだ彼らの方が少数派で、変わ

り者扱いされていたような気がする。では、何故、嫌煙活動はこれほどにファシスト化し、喫煙者は虐げられるようになったのか？

私は、この国の未だに残る「欧米至上主義」と、それに伴う政治家、官僚のポピュリズムこそが原因だと考える。未だに云うではないか。「世界でもレストランで煙草を吸っているのは日本だけだ」、「先進諸国の中でこれ程喫煙者が多いのは日本だけだ」、それ、本当か！

世界でも…、などと云うフレーズを使う者で本当に自分の目で世界を見てきた者など殆どいない。雑誌か何やらで見た情報を適当に垂れ流しているに過ぎない。

日本で嫌煙運動が本格化した 90 年代、私はスペインにいたが、彼らは日本人以上に煙草を吸っていた。そして、これはスペイン以外、特にアジアや中南米、イスラム諸国でもそうだと思うが、大人の男にとって煙草は重要なコミュニケーション・グッズだった。商談で、あるいは友人の紹介で初対面の人と会うと、互いの名前を云った後、彼らはおもむろに胸のポケットから煙草のパッケージを取り出し、それを上下に振り二、三本煙草の頭を出し、私に、「一本いくかい」なんて感じで差し出す。

「グラシアス」、そう云って一本抜き取りくわえると、彼は自分も煙草をくわえ、そしてサッとライターを取り出し、まず私、次に自分の煙草に火をつける。その後は、二人同時にプハーッと気持ちよく煙を出し、「で、何の話だい？」とまるで以前からの友人同士車のように会話が始まる。

私がスペインに暮らしたのは随分前のことだが、その頃でも「嫌煙家」たちは、「世界でも日本だけ」と云うフレーズを使っていた。嘘だ。おそらくアメリカ都市部ではその風習はなくなったかもしれないが、でも南部の田舎町のおじさんたちは今でもそんなコミュニケーションを取っているのではないかと思う。ましてや、アジアや中南米、ヨーロッパでも、そんな風習は残っていると思う。そう、煙草を吸うのも地域差があるのだ。

私は、10 年ほど前に港区から墨田区に引っ越してきたが、港区では絶滅していた歩き煙草族がまだ墨田区には結構いる。それどころか、自転車煙草なんてのもいる。

いけないことだ、マナー違反は間違いない。だが、ポピュリズムに乗って全てを禁止すれば、こんな半端者も当然出てくる。

私の散歩コースの途中に、スカイツリータウンの屋上の喫煙所で一服と云う外せない時間が入っている。スカイツリーの根元、5 階くらいの屋上でそれ程狭くもなく、ベンチではないが、植木の縁のコンクリートに座れて、実に気持ちいい。煙草の味も格別だ。で、ここにいるとわかることがある。喫煙所は常に盛況、まだこれ程煙草を吸う人がいるのではないかと云うことは勿論だが、それ以上に意外だったのは、外国人の多いことだ。中国の人、ロシアの人、イスラムの人、勿論嫌煙主義者の好きな白人もいる。

実に多様な外国人が、煙草を楽しみにここにやってくるのだ。私は予言する。どうやら 2020 年の東京五輪に向けて、都は正に街の喫煙全面禁止と云うほどの勢いで煙草を締め出そうとしているが、そんなことすれば、ちょっと人目のつかないビルの陰などの地面は、各国の煙草の吸い殻でいっぱいになるぞ、と。

マナーが悪いのは確かだ。しかし、他に吸うところがなければそうなる。

何故、全面禁止と云う所まで、嫌煙原理主義者は走るのか？

勿論、その理屈の根源は、健康問題である。ガン、脳卒中、心筋梗塞から虫歯まで、煙草の害は、とにかく体中を蝕むと嫌煙原理主義者たちは云う。ある意味、間違っていないのだろう。医学的にも煙草は上記の病に関連性はあると云われている。

だが、ここで注目してもらいたいのは関連性があると云う言葉である。決して、直接的な影響ではない。「死因は煙草」なんて聞いたこともないし、煙草を吸わない人が肺ガンにと云う話も多々ある。

要するに程度問題である。排ガス規制の進んだ今では少なくなったが、一昔前まではクルマに排ガスを引き込んでの自殺と云うものがあつた。それ程直接的に毒素を垂れ流すクルマを乗り回し、嫌煙運動をしているって、正に原理主義者の視界の狭さの象徴である。クルマの中に煙草の煙が蔓延しても決して死ぬことはない。

1500 年前のマヤからアメリカ先住民、そして 15 世紀から 16 世紀にかけての大航海時代にヨーロッパに伝えられ、室町末期から安土桃山時代にポルトガルの宣教師によって日本に入ってきた煙草。この長い歴史の間で、煙草自体の害が問題になっているのは、ほんのここ 2、30 年のことである。現代科学が、煙草の害を遂に解明したのだ。

しかし、もう一度云う。それも程度問題だ。果たして、煙草の害とは、彼ら原理主義者が云う程、絶対的に危険なものなのか？ ストレス解消となる煙草の効果を抹殺するほどに危険なのか？ どうも、彼らの心の奥底には、科学的に見た害と云うより、「**煙草の匂いが嫌い**」とか、「**未だ煙草を吸っている奴の気が知れない**」とか、好き嫌いの発想があるように思える。だから、相手の気持ちを考えずに抹殺しようとする。正にイジメの構造だ。たちが悪いのは、彼らは健康と云う錦の御旗を持っていることだ。錦の御旗さえあれば、何をしても正しいと思っているのだ。

では、ここで嫌煙原理主義者に贈る愛煙家による原理主義的な提案をしよう。

**「そんなに体に悪いのなら、法律で禁じてくれ！」**何故、嫌煙原理主義者はそう提案しないのだ。大麻だって、覚醒剤だって、体に悪いから法律で禁じられているではないか。

食品添加物でも、一旦、害が有るとわかれば、即座に添加を禁じられる。原理主義者の言を借りれば煙草こそ諸悪の根源…、では、何故、法律で禁じられないのか？

愛煙家は、コンビニで簡単に手に入るから煙草を吸っているのだ。街から、食堂から、公園から、煙草を排除するなんて姑息な手段を使わないで、正々堂々、悪の権化として、法律で禁じ、日本全体から煙草を消滅させればいいではないか。

なのに、どうもそんな動きは見られない。と、すると…、ひょっとして…、煙草の害なんてほんの些細なものなのではないか…、何しろお国が認めているのだ。売るだけ売っておいて、吸うところをなくすなんて、謂わば詐欺だ。しかも値段はどんどん高くなる。私の愛したマルボロは遂に一箱 500 円を突破した。

結果、しがない放送作家は耐えきれず、500 円はしないケントに乗り換えた。頼むから値上げなんて云う姑息な手は使わず、ダメならダメと法律で禁じてくれ。そうすれば私など素直に煙草をやめる。まあ、隠れて吸い、どこそかの映画スター逮捕とかあるかもしれないが…、嫌煙原理主義者には理想ではないか。何故、そうしない？

昔は、「**煙草は地元で買きましょう**」と云うキャンペーンがあった。煙草の税金が街に貢献していたのだ。ましてや今、死ぬほど高くなった煙草の税金はどこに使われているのか？ イジメてばかりいずに、その税金のほんの一部を使って、せめて喫煙所にベンチを置くくらいの便宜をはかってもいいではないか。

冒頭に云った。原理主義者とは、あることの無謬性を信じ、それ以外のものを認めない傾向の人びと、聞く耳持たず、酷い場合はその原理を守らない相手を抹殺しようとする人…。煙草に関しては、この「**原理主義**」が問題のような気がする。私は、決して嫌煙主義者に喧嘩を売っているのではない。ただ、煙草の嫌いな人もいれば、煙草の好きな人もいる…、お互い気を使いましょうよと云いたいだけだ。イエスかノーか、何事もはっきり結果を出すのが白人エリート主義なら、「ま、いろんな人いるから…」と許容範囲が広いのがアジアの片隅、日本人の特徴だったのではないか。

もう、新しい令和の時代。欧米至上主義はやめて、自分たちの頭と心で考えましょうよ。東京 2020 オリンピックの際も欧米の真似なんかやめて、世界が驚く嫌煙者と喫煙者双方が幸福になる工夫を考えてくださいよ、都知事さん…。